

あけましておめでとうございます。本年もどうかよろしくお願いたします。

以下、本日の始業式で、生徒のみなさんにお話をした内容です。

みなさん、明けましておめでとうございます。今年一年も、生徒のみなさんと先生方が、健康で、ケガなく、病気なく、無事に、心おだやかに、一年間を過ごせるように願っています。

さて、今日は、「思うは招く～夢があれば何でもできる」というお話をしたいと思います。北海道にある植松電機という、社員22名ほどの小さな会社の社長さんのお話です。植松さんの会社は、北海道の真ん中あたりの赤平という町にあります。元々は、何にもなかった原っぱに、植松さんが始めた会社です。この赤平町はとってもいい街です。昔、石炭を掘っていました。いまは掘っていません。だから昔、6万人いた人口が、今は1万人まで減ってしまいました。なぜなら、仕事がないからです。それを「田舎だからしょうがない」「不景気だからしょうがない」とぼやく人もいます。でも、ぼやいても何にもなりません。仕事がなければ、つくればいい、と植松さんは考えました。

この会社では、建築現場で、重機の先につけるアタッチメントを作っています。このリサイクル用マグネット(電磁石)で、コンクリートの中から、金属だけ取り出したり、アルミ缶とスチール缶を分別したりできます。この製品の技術と特許を持っている植松さんの会社の売り上げは、全国の何と9割だそうです。でも、植松さんたちのえらいところは、このリサイクル用マグネットで儲けたお金を、宇宙への夢の実現のために使っていて、小型ロケットや人工衛星まで打ち上げているところです。また、多くの子どもや大人達に、そのモデルロケットを実際に作ってみる教室を開いていて、多くの人たちに小さな自信を持たせてくれているところなのです。以前、テレビで阿部寛さんが演じる「下町ロケット」という番組がありましたが、佃製作所のモデルにもなった工場です。

この写真は、世界に3つしかない「微小重力実験施設 COSMOTORRE(コスモトーレ)」というものです。落下カプセルを高さ50mから自由落下させると、約3秒間の微小重力環境が実現するそうです。微小重力とは、宇宙とか宇宙船の中では、無重力になり、宇宙飛行士がぶかぶか浮いているような、あんな感じだと思ってください。この環境を求めて、世界各地から宇宙航空の研究者たちがやってくるそうです。他にも、医療用実験装置の開発や、南極探検用のソリも作っています。

植松さんは、この写真にのっているように、小さい時は、みんながラジオ体操をしているのに、一人だけグラウンドに絵を描いている子どもだったそうです。そばでお母さんが寂しそうに見つめています。植松さんは、本を読むのが大好きで、漢字を読むのは100点でした。でも、漢字が書けなかったので、書き取りテストをすると0点でした。計算も得意でしたが、筆算ができないので、「算数がだめだな」といわれて、算数が嫌いになったそうです。そんな植松さんが、大好きな飛行機やロケットの仕事をしたと言ったときに、お母さんが言った言葉は、『あなたには無理だわ』とか『頑張ればできる!』とは言わないでそのかわりに、『思うは招く』だよ(×2)、って教えてくれたそうです。これは、思ったらそうなるよ。思い続けることが大事なんだよ。と言う言葉でした。お母さんは、気休めの言葉を教えてくれただけかもしれないけれど、この言葉のおかげで、それから植松さんはいろんなことができるようになった気がする、とおっしゃっています。

植松さんは、国語も算数も苦手でしたが、飛行機やロケットなどいろいろなものに興味がありました。でも、ロケットの研究は有名な大学に行かないととても無理だ、といわれていたり、作るのがむずかしくて、危ないからつくっちゃいけないと思ったりして諦めていました。でも、そんな植松さんが、ロケットを作れるようになったのは、北海道大学の永田晴紀先生と出会ったからです。永田先生は、「危ないなら、安全なロケットをつくればいいんじゃない?」と考えていました。でも、永田先生は、永田先生で、お金がなくて困っていました。植松さんもあげるほどのお金は無かったのだけれど、植松さんは、工作が得意なので、「永田先生、僕が部品つくるから・・・」って言ったら、永田先生は、一緒にやろうって言ってくれたのです。そしてそれから二人は助け合うようになりました。なぜなら、二人とも足りなかったからです。具体的には、植松さんにはロケットの知識が足りませんでしたし、永田先生には物を作る力が足りませんでした。でも、あるいは、だから二人は助け合えたんです。このように、人間は足りないから助け合えるんです。どうか、みなさん、足りないことがあっても、そんな自分をダメだとは決して思わないでください。どこかで誰かがあなたの助けを待っているかも知れませんから。

これは、植松さんの工場で開いている親子ロケット教室の様子です。みんな、生れて初めてロケットを作るので、ちゃんと組み立てられるのか、不安な気持ちです。でも、この教室では、ロケットの作り方は教えません。じゃあ、一体、どうするのでしょうか。植松さんは、「ロケットの設計図がありますから、その絵を見ながら、同じ机にいるみんなと協力し、教え合ってロケットを作ってください。」「わからないことがあったら、そのままにしないで、わかっている人、あるいは、わかっていそうな人に聞いてください」とだけ、言います。



ウラにつづきます。→

教室の中にはいくつかのチームがあり、そのチームの中で、お互いに教え合うことになります。わかっている人、チャレンジしてうまく組み立てられた人が、困っている人を手助けする形です。植松さんは「わからないことを恥ずかしいと思わないで。この世界は、わからないことで、あふれています。まず自分でやって考えて、それでわからなかったら助けを求めればいい。失敗したときも隠したりしないで、手を挙げて知らせてください」と話しかけます。

何とか、ロケットが完成したら、いよいよ打ち上げです。安全確認の後、カウントダウン「3・2・1・発射〜!」ロケットは、時速 200 キロで大空に飛び出します。それは目にもとまらぬ速さであつという間に上空まで到達します。余りのスピードに誰もが目を見張った後、ワテンポ遅れて歓声が上がります。「オー!」「スゴイ」「ビックリしたー」でもロケットを持って発射の順番を待つ子どもたちが、なぜか『お先にどうぞ』と言い始めるのです。それは、自分のロケットが、本当に飛ぶかどうか、急に自信がなくなるのです。飛ばす自信がない。できれば飛ばしたくない。隠れていたい。失敗したらどうしようと考えるのです。そんなこと、みなさんありませんか?

そうやって人に譲っていても、そのうち自分の番がやってきてしまいます。自分の順番がきたら仕方がないので、スタートボタンを確認します。カウントダウンとともに、心臓のバクバクが高まっていきます。「3・2・1、発射ー!」思い切って、ボタンを押します。エンジンの爆発音で思わず目をつぶります。「オオーツ!」周りから歓声が上がります。目を開けて大空を探すと、ロケットが見えます。「やったー!」なんだか、もの凄いことをしてかした気がします。植松さんは言います。「不安の向こうに喜びがあります。失敗したらどうしよう。失敗するかもしれない、といってさけてばかりいると、喜びに出会わないで終わっちゃうかもしれません。」「ほんのちょっと勇気を出してみましょう。そしたらきっと涙が出るような素晴らしい思い出と喜びが見つかります。ほんのちょっとの勇気で大丈夫ですから。」

今日のお話は、思い続けていたら、必ずかなうというお話でした。もうひとつ、みなさんに覚えていてほしいのは、夢に近づく道は無数にあるということです。まずは、なぜその夢を持ったかということをよく考えてみてほしいんです。大好きな野球に関わる仕事につきたいのなら、プロ野球選手にはなれなくても、阪神園芸という会社に就職して、グラウンドキーパーになって球場の管理をしたり、ミズノに就職して、いろいろな人に最新のグローブやバットを紹介したりすることもできます。人の命を救いたくてお医者さんになりたいと思っている人は、お医者さん以外にも、患者さんを治療するのに使っている道具や薬を作ったり、ドクターヘリの操縦士になって、人の命を救ったりすることもできます。このように、自分の夢や目標をかなえる道は、無数にあるということです。

また一方、夢と仕事をわけて考えても全く構いません。19世紀、ドイツのシュリーマンは、商売でお金を貯めてから、ギリシア神話にでてくるトロイの遺跡を発掘しました。江戸時代、伊能忠敬は隠居してから、17年かけて、全国を歩き、日本地図を完成させたのです。仕事に集中して取り組み、毎日早めに切り上げ、自分の夢や趣味のために時間やお金を使うというのもすばらしい生き方です。

どうか、みなさんそれぞれの夢、将来、こんなことをしたい、こんな風に人の役に立ちたいといったようなそれぞれの夢に向かって、まずは何でその夢をめざしたのかをよく考え、その夢に近づくための努力を続け、壁にぶつかったりしたときには、遠慮なく人の助けを借りてください。逆に、友達から相談されたり、夢を聞かされたりしたら、間違っても、「あなたには、どうせ無理」というのではなくて、その夢がむずかしそうだなと思い、また話した方が悩んでいたとしたら、「だったらこうしてみたら?」と、やさしいアドバイスを贈ってあげてほしいと思います。ご家族や先生方も、きっと、みなさんの夢や目標に向かって「どうせ無理」というのではなくて、「だったらこうしてみたら?」とアドバイスを下さることだと思います。

今日、お話しした植松努さんの著書が、アースギャラリーの前村勇貴さんの本棚に入っています。他にもみなさんに読んでほしい本が何冊かおいてあります。ぜひ、いちど手にとって読んでみてください。以上で、始業式のお話を終わります。

